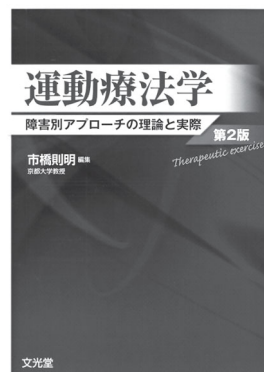


□ 書評 □

市橋則明(編)

運動療法学 障害別アプローチの理論と実際(第2版)

評者 伊橋光二
(山形県立保健医療大学)



市橋則明氏編集による『運動療法学—障害別アプローチの理論と実際』が初版から6年にして大幅な改訂がなされ、第2版として上梓された。本書は「運動療法の基礎知識」13項目と「運動療法の理論と実際」18項目で構成されているが、「基礎知識」に2項目が新たに加わり、また全体で12項目の執筆者が交代しており、市橋氏のこの書に懸ける並々ならぬ思いが示されているように思える。

この6年間で理学療法士は倍増し、運動療法が提供される機会も大幅に増えているが、その質は向上したのだろうか。患者を評価し、その個別的状況に応じて適切な運動を行わせることで効果を引き出していくべき理学療法士が「この疾患にはこのプログラム」と何も考えずにステレオタイプになっていないだろうか。そのような現状を生み出す養成教育や講習会があふれては理学療法の発展は望めない。

そこで重要なことは、運動療法の原理を徹底的に理解することであり、身体運動のメカニズムと、運動が身体に与える影響を運動療法の視点から、より深く把握することと考えられる。この観点から、本書の存在する意義は大変大きいと考えられる。前半の「運動療法の基礎知識」では、運動学を中心に、運動と呼吸、循環、代謝との関連、さらに運動と学習、発達、老化との関連が詳述されている。今回、痛みの基礎知識と

視覚と運動制御が加わり、運動療法の原理を科学的に理解するための好適な書となっている。

後半の「各種障害に対する運動療法の理論と実際」は、「各疾患の知識を持った上で、患者の障害に対してアプローチするのが理学療法である」という理念に基づき、本書の副題である「障害別アプローチの理論と実際」に従って、関節可動域制限や筋力低下をはじめとして、バランス障害、協調性運動障害、姿勢障害、歩行障害、さらに嚥下機能障害や加齢による機能障害など計18項目の障害別運動療法が網羅されている。各項目を、障害の分類、評価の進め方、運動療法の理論、そして運動療法的な進め方の順で焦点を絞って解説する形式は初版から継承され、読者の理解を助ける構成となっている。

本書は今回の大改訂で最新のエビデンスを盛り込んで内容を刷新および追加しており、より実践的な書となっている。学生向けの教科書としてだけでなく、臨床現場の理学療法士にとっても運動療法を見直す視点を数多く提供している。ぜひ多くの理学療法士に一読を勧めたい書である。

●B5判・540頁・2色刷

定価：7,560円(本体7,000円)

文光堂刊、2014年